

# 否定と呼応する「とうてい」「とても」について

大崎 志保

キーワード：呼応、共起、実現可能、潜在可能、自動詞可能

## 1. はじめに

本稿で扱う現象は、以下のような例である。

- (1) 個々の会社の名前など、{とうてい／とても}覚えられない。
- (2) このままでは、時間に {とうてい／とても}間に合わない。

これらの副詞「とうてい」「とても」は否定と呼応し、その否定述語を修飾するという点では従来の研究においても共通の見解になっている（山田 1942、渡辺 1949、森田 1982、宮島 1983 など）。さらに、たとえ否定と共起した文であったとしても不適格になる場合があることも指摘されている。たとえば以下のような場合である。

- (3) ??アルコールは {とうてい／とても} 飲まない。
- (4) ??夏でも靴下は {とうてい／とても} 履かない。

このような現象に対し、工藤浩（2000）、工藤真由美（2000）では、「とうてい」「とても」は否定と呼応するという性質のほかに、「不可能」という概念とも関わりがあることが述べられている。しかし、これらの論文では、「不可能」という概念が、「とうてい」「とても」の示す意味を表しているものなのか、呼応する成分を記述しているものであるのか、といった点については詳しく述べられていない。

本稿では2節において、先行研究における「不可能」という概念を概観し、3節において「不可能」が「とうてい」「とても」の呼応する成分に関わることを実例による調査から明らかにする。その上で、「とうてい」「とても」の文法的制約を記述することを目的とする。

## 2. 先行研究と本研究の位置づけ

本節では、先行研究のうち「不可能」という用語によって「とうてい」「とても」を記述している工藤浩（2000）、工藤真由美（2000）を概観する。

工藤浩（2000）では、呼応する副詞をまず大きく、A 行為的な叙法と B 認識的な叙法に分類する。否定と呼応する副詞はこのうち B に分類され、さらに以下のように下位分類されている。

- (5) (i) 否定判断性 けっして／まさか よもや／断じて  
部分否定性 必ずしも 一概に あながち まんざら

- とりたて性 別に 別段 格別 ことさら  
 (ii) 程度限定性 たいして さほど さて ちっとも すこしも など  
 (iii) 動作限定性 ろくに めったに さっぱり ついぞ たえて  
 (不可能) とても とうてい なかなか どうにも  
 (疑問詞) なんら なんの なにも なにひとつ

(p.189)

この下位分類に従うと、「とうてい」「とても」は(iii)動作限定性のさらに下位分類に当たる「不可能」に属することになる。しかし、工藤浩(2000)の分類ではこれらの分類に対する詳細な記述がないため、「不可能」が文法的制約を意味するのか、意味記述であるのか曖昧である。

一方、工藤真由美(2000)においては、否定と呼応する副詞の一類の中で「とうてい」「とても」を(6)のように位置づけている。

#### (6) 工藤真由美(2000)の分類

述語のタイプ	否定のあり方		副詞
A 名詞述語 形容詞述語 動詞述語	判断	断定：完全	けっして、べつに
		断定：不完全	かならずしも、あながち、まんざら、 いちがいに
		推量	まさか、よもや
B 形容詞述語 動詞述語	量・程度	完全	ちっとも、すこしも、いささかも、 みじんも、まるで、まるっきり、 ぜんぜん、さっぱり、いっこうに あまり、たいして、さて、さほど、 それほど、そんなに、そう
		不完全	
C 動詞述語	実現	不可能 困難 頻度(時間) (量)	とても、とうてい なかなか、どうにも めったに、ついぞ、ひさしく (ろくに)

(p. 107)

工藤真由美(2000)では、「とうてい」「とても」を「不可能」に、「なかなか」「どうにも」を「困難」に分類している点で、工藤浩(2000)とは記述が異なる。工藤真由美(2000)では、「不可能」と「困難」に分類する基準を以下の例で示している。

- (7) とてもできない。  
 (8) なかなか言わない(言えない)。

これらの例は、(7) は (7') のように「なかなか／どうにも」と置き換えることができるが、(8) は (8') のように「とても／とうてい」と置き換えにくいという違いがある。

(7') {なかなか／どうにも} できない。

(8') ?? {とても／とうてい} 言わない。

のことから、「不可能」と「困難」の間に現象の違いがあることはわかるが、「不可能」「困難」という用語についての記述が行われていないため、これらの概念が呼応する要素のことなのか、それぞれの副詞の意味・用法のことなのかは明らかではない。

また、工藤真由美（2000）は否定を (9) のように二種類に分けて記述している点でも、工藤浩（2000）とは異なっている。

(9) (i) 文法的否定形式：「来ない、寒くない、学生ではない」といった、肯定形式  
「くる、寒い、学生だ」と文法的に対立する否定

(ii) 語彙的否定形式：「不親切だ、無関係だ、非常識だ」といった、主語と述語  
の結びつきを否定するものではない「語否定」

このうち、「語彙的否定形式」を「基本的に」呼応しないものと位置づけ、以下のような例を挙げている（p.103）。

(10) a. \*彼女はちっとも非常識だ。

b. 彼女はちっとも非常識ではない。

(11) a. \*一日で仕上げるのは別に無理だ。

b. 一日で仕上げるのは別に無理じゃない。

ただし、「とうてい」「とても」の場合には、語彙的否定形式と共に起する場合があることも指摘している。

#### (12) 語彙的否定形式との共起

語彙的否定形式	
C とうてい	不可能だ、無理だ、駄目だ／難しい
とても	無理だ、駄目だ／賛成しかねる、耐え難い
なかなか	到達しがたい、見出しつらい、分りづらい、できかねる
どうにも	救いがたい、歌いにくい／具合が悪い、苦しい、苛立たせる

(p.114)

(12) の表に従うと、「とうてい」「とても」はそれぞれ「不可能だ」「無理だ」「駄目だ」といった語彙的否定形式とは呼応することになる。工藤真由美（2000）では、このような「とうてい」「とても」が呼応する語彙的否定形式を「意味の観点」から「不可能」という一類に位置づけている（p.115）。語彙的否定形式の場合の「不可能」と文法的否定形式の場合の「不可能」との関係については述べられていないものの、語彙的否定形式と文法的否定形式に共通して「不可能」という用語が使用されていることから、両者に共

通した概念であり、何らかの文法的制約であることを示唆していると思われる。

本稿では、否定と呼応する「とうてい」「とても」に関して、否定との呼応のほかに関与している「不可能」という概念がどのようなものなのか、またそれがどのような文法的制約であるのかを明らかにすることを目的とする。そこで、まずは否定と共に起している実例を収集し、「とうてい」「とても」が実際に呼応する成分が何か分析する。その際には、語彙的否定形式と文法的否定形式の「不可能」がどのように関係しているかは明らかではないため、語彙的否定形式と文法的否定形式に分けて分類し、本稿ではそのうち文法的否定形式を中心に、共起している成分に共通する特徴を考察する。その上で、「とうてい」「とても」の呼応する成分を記述することとする。

### 3. 何と呼応する副詞か

#### 3.1 調査の範囲と結果

今回の用例調査では、朝日新聞全記事データ（DNA）を使用し<sup>1</sup>、否定形式と共に起している用例を収集し、形式ごとに分類した。

採集した用例は、否定と共に起する用例が「とうてい」が376例、「とても」が458例である。このうち、文法的否定形式と共に起する用例は「とうてい」が341例、「とても」が439例であり、語彙的否定形式は「とうてい」35例、「とても」19例であった。本稿ではこのうち、文法的否定形式を考察の対象とし、その内訳を表1、表2に示す。

【表1】「とうてい」の用例数

「れる／られる」 <sup>2</sup>	140 (41.1%)
「できる」	119 (34.9%)
自動詞	63 (18.4%)
受身	11 (3%)
N がない	6 (1.7%)
うる・える	2 (0.6%)
合計	341

【表2】「とても」の用例数

「れる／られる」	268 (61%)
「できる」	93 (21.2%)
自動詞	67 (15.3%)
N がない	11 (2.5%)
合計	439

これらの例のうち、両者に現れた例は「れる／られる」、「できる」、自動詞、「N がない」であった。「うる」、「える」、「受身」に関しては、「とうてい」にのみ用例が現れたが、以下のように「とても」とも共起が可能である。

<sup>1</sup> 「とても」は2000年1月～4月のテキストを、「とうてい」は1997年～2000年のテキストを使用した。今回の調査では「とうてい」のほうが用例の出現数が少ないので、「とうてい」の調査範囲を広くした。

<sup>2</sup> 以降、「(r)e-ru/(r)are-ru」（いわゆる可能動詞も含む）を「れる／られる」、「できる」（できる、ことができる、漢語名詞+できる）を「できる」と表記する。

- (13) a. 実質的審理を行うことなく審理を終結するものであり、とうてい許されない暴挙である。(1998/7/10)
- b. 実質的審理を行うことなく審理を終結するものであり、とても許されない暴挙である。
- (14) a. 民主主義のイロハさえ理解しない不明朗体質の下では、自治体監視の役割はとうてい望み得ない。(1997/7/30)
- b. 民主主義のイロハさえ理解しない不明朗体質の下では、自治体監視の役割はとても望み得ない。

ゆえに、今回のデータにはなかったものの、これらは「とても」とも共起が可能であると考えられる。このうち、「うる」「える」に関しては、金子（1980）などにおいて「認識可能」と呼ばれ、可能表現の一類とされている。

以上の結果から、「とうてい」「とても」は、工藤真由美（2000）では動詞述語を否定すると記述されていたが、実際には動詞述語であるだけではなく、否定が接続する要素そのものに以下のような偏りがあることがわかった。

- (15) (i) 可能形を伴った有標の形式が多いこと  
 (ii) 動詞述語の中でも、無標の形式は自動詞だけであり、他動詞がないこと  
 (iii) 「Nがない」という先行研究にはない形式も存在すること
- それでは、「とうてい」「とても」と呼応するこれらの成分に共通するものとは一体なんであろうか。次節では、可能表現である「できる」「れる／られる」「うる／える」と自動詞・受身に分けて分析することとする。その上で「Nがない」という用例について考察する。

### 3.2 潜在か実現か

本節では、可能表現と「とうてい」「とても」との共起関係について考察する。「とうてい」「とても」は、「できる」「れる／られる」といった可能表現すべてと共に起するわけではない。

- (16) そんな靴では {とうてい／とても} 山登りはできない。  
 (17) 彼女には {とうてい／とても} そんなセリフは言えない。  
 (18) ?私は生まれつき体が弱くて {とうてい／とても} 山登りはできない。  
 (19) ?うちの妹ははずかしがりやだから {とうてい／とても} そんなセリフは言えなかつた。

(16) (17) は「とうてい」「とても」と共起することが可能な文である。一方、(18) (19) は(16) (17) に比べて、「とうてい」「とても」と共起すると適格性が落ちる<sup>3</sup>。本稿では、これらの違いは可能表現の意味の違いによって現れる現象であると考える。では、(16) (17) と (18) (19) の可能文にどのような違いがあるのか。本稿では、渋谷（2002, 2005）の

---

<sup>3</sup> ただし、(16)～(19) の内省判断にはゆれがあり、差がないとする母語話者も存在する。

「潜在可能」と「実現可能」という二分類に着目したい。渋谷（2002、2005）では可能表現を「行為の実現が含意されているか否か」によって「潜在可能」と「実現可能」に二分している。

(i) 実現可能：行為の実現の有無も含んで述べるもの。動作の発動が予定されているか（未来）、実際に発動されている（過去・現在）。

(20) 今インクを取り替えたから、明日中には全部印刷することができる。

(21) 昨日は泳げた。

(ii) 潜在可能：行為の実現の可・不可について、その行為を行う力や条件がそろっているかどうかだけを述べるもの。動作の発動は、確実に行われるものとしては予定（過去の場合、実現）されていない。

(22) 今日は気分がいいからいくらでも泳げるよ。二時間ぐらい泳いで見せようか。

(23) そのときそこに行けたのに行かなかった。

さらに、渋谷（2002）では、(i) と (ii) の違いを「潜在可能文は状態を表すのでテイルが共起しないが、実現可能は達成を表すため、（共通語では）テイルが共起した文を作ることができる」とその違いを環境によって明らかにしている<sup>4</sup>。

(24) 太郎は今日は美味く泳げている。

(25) 太郎は美味くケーキが作れている。

(26) ??今日は気分がいいからいくらでも泳げているよ。二時間ぐらい泳いで見せようか。

(27) ??そのときそこに行っていたのに行かなかった。

この記述に従うと、テイルと共に起する (24) (25) は実現可能に、テイルと共に起すると不自然になる (26) (27) は潜在可能に分類される。先ほど挙げた「とうてい」「とても」と共起しにくい (18)、(19) は、以下のようにテイルと共に起ができない。

(18') ??私は生まれつき体が弱くて山登りはできていない。

(19') ??うちの妹ははずかしがりやだからそんなセリフは言えていなかった。

また、今回の用例に関してテイルのテストを用いると、「とうてい」「とても」の環境では、テイルが共起できないことがわかる。

(28) a. なにより信頼がなければ、人びとはとうてい納得できない。

(2000/10/16)

b. ??なにより信頼がなければ、人びとは納得できていない。

(29) a. 企画の中には一千万円近いものもあり、小さな村の財政では、キャンプ地になるかどうかわからない段階では、とても出せない。(2000/1/21)

b. ??企画の中には一千万円近いものもあり、小さな村の財政では、キャンプ地になるかどうかわからない段階では、出せていない。

<sup>4</sup> 筑波大学応用言語学月例研究発表会（2005年10月19日）の席上、田川拓海氏より状態を表す場合にも「テイル」が共起する場合があるとの御指摘をいただいた。詳細は Yamagata (2000) を参照のこと。

以上のことから、「とうてい」「とても」は可能表現すべてと共に起が可能であるわけではなく、「潜在可能」の意味の場合だけ可能であるといえる。前述したように潜在可能は「行為の実現の可・不可について、その行為を行う力や条件がそろっているかどうかだけを述べるもの。動作の発動は、確実に行われるものとしては予定（過去の場合、実現）されていない」という意味である。これらをまとめると、「とうてい」「とても」の呼応には以下のような性質があると仮定できる。

- (30) 「とうてい」「とても」は、文法的否定形式において、「実現の可能性」を述べる述部に否定要素が加わったものに呼応しなければならないという文法的制約がある。  
このため全体として「とうてい」「とても」と呼応する要素には、「実現の不可能性」の意味が必須となる。

工藤真由美（2000）において記述されている「とうてい」「とても」の否定のあり方としての「実現の不可能」は、このような述部と否定要素の関わりと関係しているのではないかと思われる。

ここまで、可能表現のうち「できる」と「れる／られる」の形式について考えてきたが、前節で示したように、「うる／える」という可能表現と呼応する場合もある。今回の用例調査では、以下の2例だけが存在した。

- (31) 憲政の常道などはどうてい行い得る時代ではございません。（1997/4/30）<sup>5</sup>  
(32) 民主主義のイロハさえ理解しない不明朗体質の下では、自治体監視の役割はどうてい望み得ない。（1997/7/30）

「うる／える」については、可能表現であるということに関しては相違はないと思われるが、「れる／られる」「できる」という可能表現と同様の意味を表すものなのか、異なる可能表現であるのか見解が分かれているのが現状である。金子（1980）では「うる／える」と「できる」「れる／られる」では表す意味が異なるとし、前者を「認識可能」、後者を「ちからの可能」と名づけている。その要因として、以下の例をあげ、説明していく。

- (33) 「また戦争があるでしょうか」  
「×できます。」（これは「あります／おこります」などとなるはずのもの）  
たしかに、(33) の例で示されているように、この環境に「できます」は生起できない。このことから、「できる」「れる／られる」といった可能表現とは異なる側面があることは事実であると思われる。ただし、この例から「うる／える」が「できる」「れる／られ

<sup>5</sup> (31) の例は名詞述語文の否定と思われる例であり、一見すると工藤真由美（2000）の「動詞述語文」の否定の反例に思われる。このような例に対し工藤真由美（2000）では、「規定語（連体修飾語）の部分が否定の焦点となり名詞述語部分は否定されない」（p.109）ことから、名詞述語文の否定ではないとしている。すなわち、(31) のような連体修飾句における名詞述語文の否定の場合には、呼応する否定の焦点となっているのは名詞述語文の名詞述語ではなく、連体修飾節となっていることになる。この事実は以下のようないかえができるところからも明らかである。

(i) a. とうてい行い得る時代ではございません。  
b. とうてい行い得ない時代でございます。

る」とは意味領域が完全に異なっていると結論付けることはできない。たとえば、以下の場合である。

(34) 「私でもこの車を運転できるか」

- a. 誰でもこの車を運転することができる。
- b. 誰でもこの車を運転しうる。

この場合に、(34a) と (34b) 両方生起が可能であると思われる。その際に、これら (34a) (34b) がそれぞれ「ちからの可能」と「認識の可能」を表す可能表現であるのか、両方とも同じ意味領域を表している可能表現であるのかは明らかではない。

渋谷 (2005) においても、「うる／える」と「れる／られる」を比較した記述がある。

(35) 「「うる／える」は]可能文が作れない状態動詞アルや無意志動詞（起コルなど）に付加した場合にもっとも典型的に蓋然性をあらわすが、意志動詞の場合でも文脈がなければ可能と蓋然性の間で二義的になることがある。

(36) そういうこともありうる／起こりうる。

(37) 救助隊はそのような場合、いつでも出勤しうる。

(p.48)

渋谷 (2005) では、「ちからの可能」「認識の可能」ではなく、「可能」と「蓋然性」という用語が使用されているが、両者の意味の境界が曖昧であり、二義的になる可能性があることが示唆されている。今回の用例である「行う」「望む」がいずれも意志動詞であることを考えると、これらの用例が「うる／える」独自の意味を表すのではなく、「できる」「れる／られる」と同様の可能の意味を表す場合もあると思われる。また、今回の用例が意志動詞のみであったことを考え合わせると、「うる／える」の用例は (30) の仮説の反例ではないと考えられる。ただ、意志動詞の場合に現れる意味と無意志動詞の場合に現れる意味が実際に異なっているのかといった点は再考する必要があると思われる。

次節では、(30) の仮説をふまえて自動詞について考察することとする。

### 3.3 自動詞と受身

今回の調査では、「とうてい」「とても」と呼応する自動詞の例は「とうてい」63例、「とても」67例であった。その動詞群は以下のようなものであった。

(38) とても

（経営が実態と）合う、（納得が）いく、追いつく、納まる、思いつく、及ぶ、適う、  
（抑えが）きく、（歯が）立つ、たどりつく、足りる、つく、続く、務まる、手が回  
る、出る、届く、成り立つ、なる、残る、はある、まとまる、間に合う、持ち上  
る、もつ、割に合う

(39) とうてい

相入れる、かかる、映る、追いつく、落ちる、おぼつく、及ぶ、終わる、適う、も  
つ、成立する、足りる、捕まる、つく、通る、届く、（納得が）いく、納得する、成

り立つ、なる、歯が立つ、まとまる、間に合う

自動詞に関しては、大崎（2005a）において、「自動詞可能」と名づけ、自動詞によって可能の意味が現れる現象について触れた。今回の調査で収集したこれらの自動詞も、「自動詞可能」である可能性がある。仮に、これらの自動詞が可能の意味を表す自動詞であるとするならば、(30) の仮説と一致する現象となる。

では、これらの自動詞も自動詞可能であるのか、単なる自動詞であって可能の意味がないのだろうか。ここでは、大崎（2005a）にあげた自動詞可能の文法的制約を元に考えたい。

(40) 自動詞可能の文法的制約

- (i) 語彙的使役交替をする非対格動詞である。
- (ii) 動作主の存在を含意する。

(p.209)

まず、今回の用例に関して言えば、「相入れる」「成立する」「納得がいく」など、語彙的使役交替をしない非対格動詞も共起している。

(41) 平和憲法のもとでは、とうてい相入れぬ法案である。(1999/5/9)

(42) 「扶養意識のない男」と「自立意識のない女」では、とうてい結婚生活は成立しないと思える。(1999/7/28)

(43) 結果的にウソの説明を聞かされていた国民にとっては、とうてい納得がいかないんだろう。(1998/5/15)

その点から言うと(38)(39)の自動詞すべてが(i)の自動詞可能の制約と合致するわけではない。これら語彙的使役交替をしない自動詞を自動詞可能の例外とするのか、自動詞可能ではないとするのか、ということが問題になる。

(ii) の制約に関しては、大崎（2005a）では動作主の存在を含意するかどうかを、「難なく」「どうしても」との共起が可能かどうかによってテストした。

- (44) a. 新刊本がそろった。  
b. 難なく新刊本がそろった。  
c. どうしても新刊本がそろわない。

- (45) a. アパートの家賃が上がる。  
b. \*難なくアパートの家賃が上がる。  
c. ??どうしてもアパートの家賃が上がらない。

(44a) の場合は(44b)(44c)のように「難なく」「どうしても」と共起が可能なため動作主の存在を含意する自動詞であり、(45a)の場合は共起が不可能なため動作主の存在を含意しない自動詞であることになる。

今回の用例では、「難なく」「どうしても」と共起が可能なものと可能ではないものが存在する。

- (46) a. 自動車を購入する水準に難なく追いつく。  
b. 自動車を購入する水準にどうしても追いつかない。

(47) a. \*経済振興や市民生活の充実といった施策の実現は難なくおぼつく。

b. 経済振興や市民生活の充実といった施策の実現はどうしてもおぼつかない。

この場合、「追いつく」は(46a)(46b)のように「難なく」「どうしても」と共起が可能であるが、「おぼつく」は(47a)のように「難なく」とは共起ができない。「おぼつく」以外にも、今回の用例にある自動詞のうち、「手が回る、割に合う、歯が立つ」は「難なく」とは共起が不可能である。これら「難なく」と共起できない自動詞には、肯定文で用いられる場合がないという共通の特徴がある。また、肯定文で用いられるほかの自動詞に関しては、「難なく」と共起できるという点からも考え合わせると、動作主の存在を含意しないために不可能なのではなく、否定文でしか現れない自動詞であるためであると思われ、(ii)の反例とはならないと考える。

以上のことから、語彙的使役交替をしない非対格動詞については考察が必要であるが、それ以外の自動詞に関しては自動詞可能である可能性が高いことになる。したがって、語彙的使役交替をしない非対格動詞がなぜ「とうてい」「とても」と共起が可能であるのかが明らかになれば、なぜ可能形式を伴わない自動詞がこれらの副詞と呼応するのかが明らかになると思われる。現段階では明らかにはできないが、語彙的使役交替をしない非対格動詞がどのような場合に「とうてい」「とても」と共起が可能であるのか、またさらに、このような自動詞が可能の意味を表す場合があるのかも含めて今後考察したいと考えている。

今回の調査で挙がった自動詞が、なぜ「とうてい」「とても」と呼応するのか、といった疑問が解決されれば、なぜ受身が許容されるかという問題も解決されるのではないかと考えている。今回の調査の用例では、受身形であらわれている動詞は、「許す、認める、容認する、理解する、達成する、支持する」といった6つの動詞であった。用例は以下に示す。

(48) ふだんならとうてい容認されない事業が、「五輪」の名のもとに独り歩きすることはないのか。(1997/3/16)

(49) この問題を行革の焦点からそらすような姿勢は、とうてい許されない。

(1997/10/8)

これらの6つの動詞には、以下のようないくつかの特徴がある。

(50) (i) 受身文において動作主が現れない。

(ii) 対応する自動詞のない他動詞の受身形である。

(50) の特徴を自動詞可能の制約と考え合わせると、動作主が潜在化する点、語彙的使役交替を行わない代わりに、受身形になることで非対格化する点など、共通する部分が多いことがわかる。これらの点から、(50)の特徴を有する受身と自動詞可能にこのような共通点が存在するために、「とうてい」「とても」と呼応すると考えられる。しかし、それ以上に、このような受身が可能表現に近いものであるとするかどうかについては、今後の課題としたい。

### 3.4 「N がない」

今回の調査では、先行研究では論じられなかった「N がない」という形式があることがわかった。たとえば以下のような例である。

(51) この緊張もたまには脳の刺激になっていいかなと思うのだが、試合中はとても

そんな余裕がない。(2000/6/3)

(52) 何しろ相手のバックには有名な評論家や思想家がずらりと控えているのだから、  
とうてい勝ち目がない。(1998/1/9)

今回の調査では見つかった用例は数も少なく、これだけで一般化することは難しいが、他の名詞句のほとんどがこの環境に共起できないことからも考え合わせると、名詞自体の意味によるところが大きいのではないかと思われる。また一方で、用例の中には名詞のみでは「とうてい」「とても」と共起しにくいものもある。

(53) a. とてもゴージャスやエレガントな装いには縁がない。(2000/1/28)

b. {??とうてい/?とも} 縁がない。

(54) a. それではとうてい歴史を語る資格はなかろう。(2000/10/1)

b. {??とうてい/?とも} 資格がない。

ゆえに、どのような名詞句と呼応するのか、その呼応する理由についてはその名詞だけではなく、その文脈についても明らかにする必要があると思われる。これらの問題に関しても今後の課題としたい。

## 4. まとめと今後の課題

本稿では先行研究における「不可能」という概念に着目し、実際の用例によって「とうてい」「とても」の共起成分を調査した。その結果、共起する要素の大半が可能表現であり、中でも「潜在可能」とのみ呼応することを明らかにした。そのことから本稿では以下のよう仮定した。

(55) 「とうてい」「とても」は、文法的否定形式において、「実現の可能性」を述べる述部に否定要素が加わったものと呼応しなければならないという文法的制約がある。

このため全体として「とうてい」「とても」と呼応する要素には、「実現の不可能性」の意味が必須となる。

しかし、「とうてい」「とても」の呼応する成分が「実現の不可能性」であるとするには課題が残っている。第一に、自動詞可能の制約に関する問題である。これについては、語彙的使役交替をしない非対格動詞が、無標の自動詞のまま可能の意味を表すかどうか再考する必要がある。その際には、そのような自動詞すべてが可能の意味を表すのか、あるいはある種の自動詞のみなのか、それとも文脈による支えが必要なのか詳しく検討する必要があると考えられる。次に、受身と自動詞可能との関係である。本稿では双方の共通点を指摘するとどめたが、従来、受身と可能表現との関係については類似点が指摘されている（寺村 1982、尾上 1999 など）。今後は、これらの共通性に関わる現象を考察するととも

に、これらの類似性が何に依拠するものであるのかを明確にしたいと考えている。また、本稿では考察の対象からはずしたが、語彙的否定形式との呼応についても、文法的否定形式との関係も含めて今後考察したいと考えている。

### 【参考文献】

- 尾上圭介 (1999) 「文法を考える 7 出来文 (3)」『日本語学』18 : 1, pp.86-93.
- 大崎志保 (2005a) 「日本語の自動詞による可能表現—動詞制約を中心に—」『日本語文法』5 : 1, pp.196-211.
- (2005b) 「複合接続助詞『ものなら』について」『日本語複合助詞の研究』(平成 16 年度筑波大学人文社会科学研究科プロジェクト研究「日本語複合助詞の体系化に向けた記述的研究」研究成果報告書, 研究代表者: 杉本武) pp.193-212, 筑波大学.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版.
- (2000) 「自他交替の意味的メカニズム」, 丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』 pp.37-70, ひつじ書房.
- 金子尚一 (1980) 「可能表現の形式と意味 (I) — “ちから”的可能”と“認識の可能”について—」『共立女子短期大学文科紀要』23, pp. 62-75.
- (1981) 「能力可能と認識可能をめぐって—非情物主語ということ—」『教育国語』65, pp.103-112, むぎ書房
- 工藤浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」, 渡辺実 (編) 『副用語の研究』 pp.176-198, 明治書院.
- (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法 3 モダリティ』 pp.163-234, 岩波書店.
- 工藤真由美 (2000) 「否定の表現」『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』 pp.95-150, 岩波書店.
- 渋谷勝己 (1986) 「可能表現の発展・素描」『大阪大学日本学報』5, pp.101-137.
- (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33:1, pp.1-262.
- (2002) 「可能」, 大西拓一郎 (編) 『方言文法調査ガイドブック』(PDF 版) pp.7-27.
- (2005) 「日本語可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』1 : 3, pp.32-45.
- 田村直子 (1997) 「共起制限に見る命題とモダリティの関わり」『筑波応用言語学研究』4, pp.83-96.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.
- 仁田義雄 (2000) 「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法 3 モダリティ』 pp.81-159, 岩波書店.
- (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版.
- 原田登美 (1982) 「否定との関係による副詞の四分類—情態副詞・程度副詞の種々相—」『国語学』128, pp.1-17.
- 三原健一(1995)「概言のムード表現と連体修飾節」, 仁田義雄(編)『複文の研究(下)』pp.285-307,

くろしお出版.

- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
- 宮島達夫 (1983) 「情態副詞と陳述」, 渡辺実 (編) 『副用語の研究』 pp.89-116, 明治書院.
- 森田良行 (1982) 『基礎日本語 1 - 意味と使い方』角川書店.
- 山田孝雄 (1942) 『日本文法學概論』宝文館.
- 湯原美香 (2000) 「現代日本語の可能表現の広がり—アスペクト形式『～ている』の付加用法—」  
『広島大学教育学部紀要 第二部』49, pp.231-238.
- 鷲尾龍一 (1997) 「他動性とヴォイスの体系」『日英語比較選 7 ヴォイスとアスペクト』pp.2-106,  
研究社出版.
- 渡辺実 (1949) 「陳述副詞の機能」『国語国文』18 : 1, pp.1-26, 京都大学.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*,  
Oxford University Press.
- Yamagata, Ayako (2000) "The Stage-Level / Individual-Level Distinction: An Analysis of  
‘te-iru,’" *MIT Working Papers on Linguistics* 36, pp.237-249.

【用例出典】

Digital News Archives for Library (朝日新聞)

※出典が表示されていない例文は作例によるものである。